

イギリスの鉄道ポスター

美術工芸資料館 特任専門職（学芸員） 和田 積希

例年秋に開催している福知山市と京都工芸繊維大学の連携企画展も今年度で8回目を迎えた。今年も、福知山市佐藤太清記念美術館の隣に「福知山鉄道館フレール」が開館したのを記念して、「福知山に世界の鉄道ポスターが集結―京都工芸繊維大学美術工芸資料館所蔵ポスター展」(会期：2023年10月29日～12月3日、於福知山市佐藤太清記念美術館)を開催し、京都工芸繊維大学美術工芸資料館が所蔵するポスターの中から世界各国の鉄道ポスターを展示した。

ポスターが広告の主役としてパリを中心とするヨーロッパの都市に登場したのは19世紀後半のこと、同時期にヨーロッパでは鉄道が重要な交通機関として発達し、通勤や旅行の手段として人々の生活スタイルを一変させた。各鉄道会社は、その速さと快適さ、そして移動距離を競ってアピール合戦を繰り広げ、ポスターはその有効な広告媒体として大いに活躍することとなった。

1920年代アール・デコ期のポスターの金字塔、A・M・カッサンドルの《エトワール・デュ・ノール》(1927)や日本初のデザイナー、杉浦非水による《東洋唯一の地下鉄道》(1927)【図1】、里見宗次の《JAPAN》(1937)など、デザイナー史に残る優れた鉄道ポスターは枚挙にいとまがない。その意味で、鉄道とポスターは密接な関わりをもって発展してきたといえる。

さて、本稿では、これら鉄道ポスターの中から、その初期をかざる1920年代イギリスの鉄道ポスターをご紹介します。いわずもがなイギリスは、世界に先駆けて産業革命を成し遂げ、蒸気機関車を生み出した国であり、ウィリアム・モリスらによるアーツ・アンド・

クラフツ運動やチャールズ・レニー・マッキントッシュらによるデザイン運動を経験し、装飾美術の先駆者でもあった。

イギリスでジョージ・ステイブソンによる蒸気機関車「ロコモーション号」が走ったストックトン・アンド・ダーリントン鉄道が開業したのは1825年のことである。1830年にはリヴァプール・マンチェスター鉄道が開業、1836年には世界最古といわれるロンドン・ブリッジ駅が開業している。1872年(明治5)の横浜・新橋間の開通以来、一貫して国の管理下で発展してきた日本の鉄道と違い、次々と私鉄が開業したイギリスでは、各鉄道

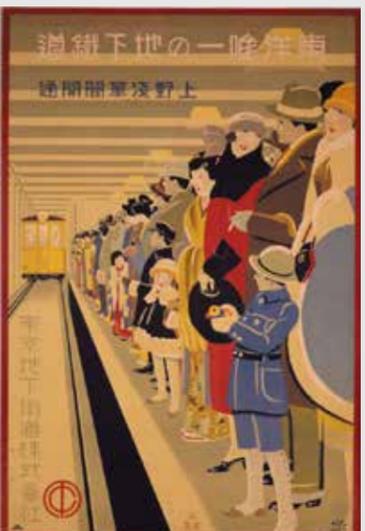


図1 杉浦非水《東洋唯一の地下鉄道》
1927年、AN.209401

さて、そうはいっても初期のイギリスの鉄道ポスターは、時刻や運賃、行先やサービス内容を知らせる文字主体の広告であった。人びとの目を引くためのイラストがそこに登場するのは主に1870年代以降のことである。寝台車や食堂車をとまとう豪華なブルマン客車の導入や風光明媚な観光地へと誘うエクスカーションの開発は、自社をアピールするための重要な要素であり、とくに旅の魅力であるリゾート地のヴィジュアルイメージはやがてポスターの重要な要素となった。

《サザンプトンから海峡を渡ろう/L&SWR》(ロンドン&サウス・ウエスタン鉄道)【図2】にみられるように、海峡をこえ移動距離をイメージさせる地図を多用したデザインも多い。同時に、帯を作って社名やロゴを大きく打ち出すのもこの時期の特徴である。20世紀初頭には、多くの鉄道会社が画家やデザイナーと契約を結び、穏やかな気候と太陽が降り注ぐ美しい海岸、健康やスポーツを謳った名所絵風のあざやかなポスターが生み出された。しか

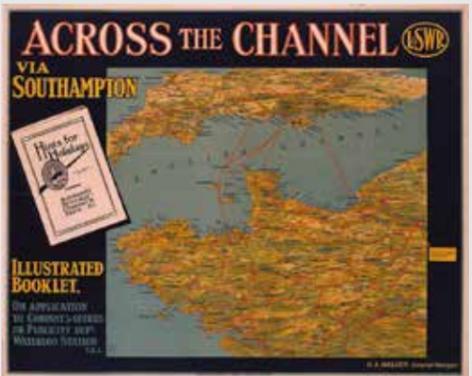


図2 作者不詳《サザンプトンから海峡を渡ろう》L&SWR (ロンドン&サウス・ウエスタン鉄道)
1922年頃、AN.4053

し、フランスでもはやされた華やかなアール・ヌーヴォーに比べ、この時期のイギリスポスターはどこかアカデミックな香りが漂う。

《我がリヴィエラ・まず国内に目を向けよう/G.W.R.》(グレート・ウエスタン鉄道)【図3】をみてみよう。グレート・ウエスタン鉄道は、ロンドンを中心に南西・西部イングランドからウェールズを結んだ鉄道会社で、1833年に設立され、1923年の統合以降も唯一単独で社名を存続させた会社である。このポスターには、アーチの奥に2つの沿岸リゾート地リヴィエラが描かれている。同じようにみえるが、左側はHOME RIVER、右側はCONTINENTAL RIVER、つまり大陸のリヴィエラである。リヴィエラは一般に、18世紀にイギリス人の保養地として栄えたニスなどコート・ダジュール地方を含む、フランスからイタリアにかけての地中海沿岸地域のことを指すが、ここでは SEE YOUR OWN COUNTRY FIRST (まず国内に

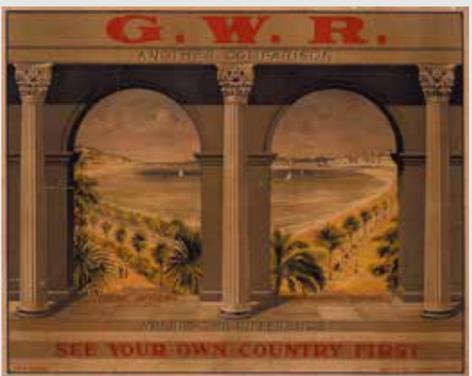


図3 作者不詳《我がリヴィエラ・まず国内に目を向けよう》G.W.R. (グレート・ウエスタン鉄道)
1920年頃、AN.4019

会社による路線敷設競争と並行して地方のリゾート開発が進み、本格的な消費時代の到来を背景に都市に住む市民たちは観光を楽しむようになった。それを決定づけたのが1851年のロンドン万国博覧会の開催である。600万人が来場したといわれる万博の開催は、国内外からの観光客を引き寄せ、旅行代理店の登場をとまとう大衆ツーリズムを呼び起こした。そこで、他の鉄道会社や交通機関をライバルとして広告合戦がスタートする。

イギリスの国民的画家J・M・W・ターナーが《雨・蒸気・速度―グレート・ウエスタン鉄道》(ナショナルギャラリー蔵)を描いたのは1844年のことだが、雨が降りしきるなか蒸気を噴き上げ轟音をたてて疾走する電車のダイナミズムを表現したその絵画からは、後年イタリアの詩人フィリッポ・マリネッティが「機銃掃射をも圧倒するかのよう」に咆哮する自動車は「サモトラケのニケ」よりも美しい(1909)と表した未来派宣言のように、機械が芸術の世界へと溶け込んでいく時代の変化をみてとることが出来る。

イギリス全土に路線が敷かれ、乱立する私鉄が終わりを告げたのは1923年のこと、123あった私鉄は政府によりロンドン・ミッドランド&スコティッシュ鉄道(LMS)、ロンドン&ノース・イースタン鉄道(LNER)、グレート・ウエスタン鉄道(GWR)、サザン鉄道(SR)の四大鉄道会社に統廃合されることとなった。各社は列車のデザインから各種パンフレットに至るまで切磋琢磨してブランド・イメージの確立につとめ、イギリスの鉄道ポスターは黄金期を迎える。

目を向けよう)とあるように、イギリス国内の海峡地リヴィエラに誘っている。《地形、気候等の点でコーンウォールとイタリアはよく似ている。まずはわがコーンウォールへ/G.W.R.》(グレート・ウエスタン鉄道)【図4】も似たような趣向になっており、形や気候の似たイタリアを引き合いに出して国内リゾート地コーンウォールへといざなっている。なお、このポスターは同柄で「1907」と年記の入ったポスターが存在しており、当館で登録されている年記が正しいのかは、再度調査が必要である。

その後、1939年に第二次世界大戦が勃発するまで、イギリスの鉄道ポスターは大きく発展していくこととなる。

参考文献

「英国鉄道ポスター展 ポスターで巡るイギリス150年の歴史と文化」英国国立鉄道博物館編、東日本鉄道文化財団、1997年



図4 A.R.C. (Arthur Gunn)『ホーベン』Johnson, Middle & Co. Ltd. 《地形、気候等の点でコーンウォールとイタリアはよく似ている。まずはわがコーンウォールへ/G.W.R.》(グレート・ウエスタン鉄道)
1921年頃、AN.4054